

## 虚詞の使用から見た歐陽脩『五代史記』の文体的特色

東, 英寿

九州大学比較社会文化研究院文化空間部門 : 教授 : 中国文學

<https://doi.org/10.15017/13191>

---

出版情報 : 中国文学論集. 36, pp.12-26, 2007-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 虚詞の使用から見た 歐陽脩『五代史記』の文体的特色

東 英 寿

## 一 はじめに

歐陽脩は、北宋・神宗の熙寧5年(1072)閏7月23日、66歳でこの世を去るが、その約20日後の8月11日に、彼の『五代史記』(新五代史)七十四卷(本紀十二卷、列伝四十五卷、考三卷、十国世家十卷、十国世家年譜一卷、四夷附録三卷)は、家族によって皇帝に献上され、初めて世間のスポットライトを浴びることになる。歐陽脩の「免進五代史状」によれば、嘉祐5年(1060)当時、唐書局にいた范鎮が『五代史記』を奏上するように強く勧めたが、歐陽脩は辞退している。つまり、生前歐陽脩は『五代史記』を公表する意志がなく、あくまで私的に編纂したのであった。歐陽脩の死後、世に出た『五代史記』は、先行する『五代史』(旧五代史)を凌駕して流行したのは周知の通りである。

私的に作成されたものであるが故に、『五代史記』の編纂方針や資料の取捨選択などについては、歐陽脩が自由に自己の考え方に則ることができたのは想像に難くない。そのため、伝聞や小説など世間では信憑性が劣ると考えられていた資料も『五代史記』に採用したことで、彼は非難されることがあったが、その一方で私的であったからこそ、歐陽脩が当時流行していた駢文には惑わされることもなく、古文の文体を用いて執筆できたことは注目すべきである。小川環樹「新五代史の文体の特色」のなかで<sup>(1)</sup>、

「新五代史」は史学者からは多くの批判をうけたけれども、やはり歐陽脩はすぐれた歴史家であったし、何よりも、文章家としてののかれのすばらしさは終に否定できない、と私は考える。

として、資料の取捨選択面でこれまで批判があったという指摘とともに、『五代史記』に見られる文章のすばらしさに言及していることは看過できない。

『五代史記』の編纂は歐陽脩が景祐4年(1037)31歳、夷陵へ左遷された頃から開始され、皇祐5年(1053)47歳の時に梅堯臣に与えた書簡に「只整頓了五代史、成七十四卷」とあることから、その頃には完成していたことがわかる<sup>(2)</sup>。すなわち、『五代史記』は歐陽脩の31歳頃から47歳頃までの17年間の長い歳月をかけて編纂されたものである。とすれば、『五代史記』は彼の青壮年期の代表的な古文によって作成されていると言うことができ、従って歐陽脩の古文の特色を探る上で『五代史記』の文章は格好の考察対象となる。

そこで本稿では、以下虚詞の使用状況に基づいて、歐陽脩『五代史記』の文体上の特色を明らかにし、更に『五代史記』に附された徐無黨注についても文体面からの考察をしたい。

## 二 虚詞に注目した理由

内藤湖南は、『五代史記』について「私撰のものであるから思ふように書き、史記の文と春秋の法を巧みにまぜ、古文で新たに書き出したものである」と記述し、『五代史記』における古文の文体に注目する<sup>(3)</sup>。

ところで、駢文では四字句、六字句や対句などが多用されているので、それらを手がかりにして文体上の特色へ切り込んでいくことができるが、古文においては文体的特色をどのようにして分析すればよいのであろうか。それに関して、劉徳清『歐陽修論稿』では「文章神氣、駢文在音律、散文在虚字、是有一定道理的」として<sup>(4)</sup>、駢文の特色は音律、そして散文(古文)の特色は虚詞(虚字)にあると指摘する。また、前野直彬編『中国文学史』では<sup>(5)</sup>、

具体的に指摘できる現象としては、助字の多用がある。句頭の夫・惟・然、句中の而・之、句末の也・矣などといった文字を助字と総称するが、これらを多用すれば句と句とのつながりが明瞭となり、読んでいて自然に論理の筋をたどることができるかわりに、文章はそれだけ長くなる。歐陽脩の文には、こうした助字が多い。その一方、助字は省略することもできるが、読者は頭のなかでそれを補いつつ読まなければならないわけで、助字の少ない文章は、読者に論理の筋をたどろうとする緊張感をあたえる。

と記載し、歐陽脩の古文について、虚詞(助字)が多用されることで、如何なる効果が生まれるのかということを分析している。この分析は、古文の特

色を考察する際に虚詞に視点を据えるのが有効であるということに基づいた論述である。清代の古文家、桐城派の劉大魁は、『論文偶記』において「文必虚字備而後神态出」と記述し、虚字（虚詞）<sup>(6)</sup>によって、文章に表情、雰囲気、霧気が備わるとして、やはり虚詞の重要性を指摘する。更に、清・劉淇は『助字辨略』自序の冒頭に、「構文之道、不過實字虚字兩端、實字其體骨、而虚字其性情也」と記述し、実字は文章の骨格であり、虚字（虚詞）によって作者の思いや感情が添加されると述べる。確かに、文末にくる断定の語気を表す「也」、「矣」等の虚詞は、たとえそれを使用しなくとも文意は変わらない。こうした虚詞を用いるかどうかは作者次第ということになり、そこに文体の特色、言い換えると作者の個性が表れると言える。

さて、歐陽脩が虚詞の使用に細心の注意を払っていたことについては、范公偁『過庭録』に次の如き記事がある。

韓魏公在相。曾爲畫錦堂記于歐公。云仕宦至將相、富貴歸故郷。韓公得之愛賞。後數日、歐復遣介別以本至。云前有未是。可換此本。韓再三玩之、無異前者。但仕宦富貴下、各添一而字。文義尤暢。

韓魏公相に在り。曾て畫錦堂を爲り歐公に記せしむ。云く、仕宦して將相に至り、富貴にして故郷に歸ると。韓公、之を得て愛賞す。後數日、歐復た介を遣はして、別に本を以て至らしむ。云く、前に未だ是ならざる有り。此の本に換ふべしと。韓、再三之を玩るに、前に異なる者無し。但だ仕宦、富貴の下に、各々一つの而字を添ふるのみ。文義尤も暢びやかなり。

歐陽脩は、韓琦に送った「畫錦堂記」の文章に納得がいかず、後にそれを別の「畫錦堂記」と交換した。その理由は文の意味に直接には関係のない「而」という虚詞を文中に付け加えたためであった。ここに虚詞一字も決して疎かにせず、文章作成に心血を注ぐ彼の真摯な姿を見て取ることができよう。

以上を要するに、虚詞は文意に直接関係しないが、しかしその使用に作者の個性が表出するのであり、歐陽脩も虚詞の使用を決して疎かにしていない。従って、歐陽脩古文の文体における特色を考える際に、虚詞を考察対象として措定することは極めて有効となり、以下本稿では虚詞の使用に視点を据えて、歐陽脩の『五代史記』における文体の特色について考察したい。

## 三 『五代史記』と『旧五代史』

清・趙翼の『廿二史劄記校證』卷二十一に「不閱薛史、不知歐史之簡嚴也」として、『五代史記』の簡嚴さを理解するためには薛居正らの『旧五代史』との比較が必要であると記述する。そこで、本章でも『五代史記』の文体を考察するに当たって、まず『旧五代史』の文章との比較を通して、その特色を窺いたい。

『旧五代史』百五十三卷は、宰相・薛居正や盧多遜、張澹、李昉らによって開宝6年(973)に編纂が開始され、翌年に完成した。これは歐陽脩の『五代史記』が完成する約80年前のことである。『旧五代史』は金の泰和7年(1207)に制定された新定学令により削去され、以後『五代史記』のみが用いられることになったので散逸してしまった。現行本は『永樂大典』及び宋代の諸資料に基づいて復元したものである。当然『旧五代史』の原本をどれだけ忠実に復元しているのかという問題が存在する。ただ、本章では『五代史記』の文体の特色を明らかにするために、便宜上『旧五代史』を比較の対象として用いたのであり、従って現行本『旧五代史』の本文が原本を完全には復元していないとしても、『五代史記』の文体上の特色が析出されれば問題は無いと考える。

そこで、まず『五代史記』列伝と『旧五代史』列伝の文章における虚詞の使用傾向を考えたい。『五代史記』列伝、『旧五代史』列伝について、五代の各王朝(後梁、後唐、後晋、後漢、後周)から各5人、合計25人の伝を考察対象とした<sup>(7)</sup>。この25人の伝において、次の15の虚詞の使用数を調査して表1にまとめた<sup>(8)</sup>。

- 而……順接、逆接、追加などを表す連詞。
- 也……認定、疑問・反語、感嘆を表す語気詞。
- 因……上句と下句を順接で繋ぐ副詞。「因之」のように、「たよる」、「もとづく」等の意味で使用される動詞の場合も含めた。
- 乃……上文をうけて下文を起こす副詞。
- 則……上句と下句を順接で繋ぐ副詞。
- 然……転折の意味を持つ連詞。
- 矣……断定を表す語気詞。
- 蓋……限定を表す副詞。
- 爾……認定を表す語気詞。
- 乎……疑問・反語、感嘆を表す語気詞。

虚詞の使用から見た歐陽脩『五代史記』の文体的特色

- 哉……詠嘆を表す語気詞。
- 焉……認定を表す語気詞。
- 耳……認定を表す語気詞。
- 邪……疑問を表す語気詞。
- 歟……疑問、反語、感嘆を表す語気詞。

(表 1)

	総字数	而	也	因	乃	則	然	矣	蓋	爾	乎	哉	焉	耳	邪	歟
『五代史記』列伝	18385	213	83	42	87	23	31	32	1	10	21	2	3	6	8	0
『旧五代史』列伝	24320	161	103	50	60	47	38	29	5	10	7	3	22	5	1	1

次に、「嗚呼」で始まる『五代史記』全ての論贊において、上述した15の虚詞の使用数を調査し、『五代史記』列伝と『旧五代史』列伝とともに表2にまとめた。(総字数が異なるので1万字当たりの出現数に換算した)

(表 2)

	字数	而	也	因	乃	則	然	矣	蓋	爾	乎	哉	焉	耳	邪	歟
『五代史記』列伝	10000	115.9	45.1	22.8	47.3	12.5	16.9	17.4	0.5	5.4	11.4	1.1	1.6	3.3	4.4	0
『旧五代史』列伝	10000	66.2	42.4	20.6	24.7	19.3	15.6	11.9	2.1	4.1	2.9	1.2	9	2.1	0.4	0.4
『五代史記』論贊	10000	291.5	172.1	15	8.9	64.2	72.4	70.3	26.6	9.6	23.9	66.9	23.2	6.8	13	19.1

更に総字数に占める15の虚詞の使用比率を調べると、『五代史記』列伝では3.05%、『旧五代史』列伝では2.22%、『五代史記』論贊では8.83%になる。ここで、『五代史記』列伝、『旧五代史』列伝、『五代史記』論贊の間における類似性を考えるためにピアソンの相関係数(そうかんけいすう)を析出したい。ピアソンの相関係数とはデータの個数に基づいた相関関係を表すものである。相関係数とは、2つのデータ列の間の相関(類似性の度合い)を示すもので、-1から1の間の実数値をとり、1に近いときは2つのデータ列には正の相関があると言い、-1に近ければ負の相関があると言う。0に近いときはもとのデータ列の相関は弱く、類似性の度合いが低いことになる。

『五代史記』列伝と『五代史記』論贊におけるピアソンの相関係数は0.8536であり、『五代史記』列伝と『旧五代史』列伝におけるピアソンの相関係数は0.9509となる。本来、同一作者であれば当然文章が類似しておりその相関係数は1に近づくが、どちらも歐陽脩の手になる『五代史記』列伝と『五代史記』論贊の間におけるピアソンの相関係数は0.8536と低くなり、そ

れに比べて作者の違う『五代史記』列伝と『旧五代史』列伝の相関係数が0.9509で1に近いという結果となった。これはどういうことを意味しているのだろうか。

まず列伝に着目して考えたい。たとえば、詠嘆をあらわす「哉」について、『五代史記』列伝では1.1字（1万字当たりの出現数、以下同じ）、『旧五代史』列伝では1.2字と、使用個数が極めて少ない。これは、『五代史記』、『旧五代史』が歴史書であるということを確認すれば当然のことと言えよう。事実を客観的に記載するのが歴史書であり、その記述ではできる限り作者の詠嘆は排除されるべきであろう。

次に、認定を表す「也」、「焉」、「爾」、「耳」について考えたい。「也」は認定を表す語気詞のうち最も一般的なもので、疑問・反語、感嘆の意味を表す場合も含めて『五代史記』列伝では45.1字、『旧五代史』列伝では42.4字使用され、「焉」はある事物または地点に対する指示的な認定の語気をもち、『五代史記』列伝では1.6字、『旧五代史』列伝では9.0字、「爾」は「ただそれだけにすぎない」という局限定的な認定を表し、『五代史記』列伝では5.4字、『旧五代史』列伝では4.1字、「耳」は「爾」と同様の意味で、『五代史記』列伝では3.3字、『旧五代史』列伝では2.1字使用されている。これら認定の意味を表す虚詞の中で、『五代史記』列伝と『旧五代史』列伝においてその使用個数にやや相違があるのは「焉」である。しかし、その差異は1万字あたり僅かに7.4字程度であり、顕著な相違とは言えない。これらの虚詞は、そもそも歴史書においてはその使用に差が出にくいと考えられる。というのも、認定（也の場合は疑問・反語、感嘆を含む）の虚詞は、作者がその表述しようとするものから確認、判定の気分を強調するもので、作者の主観的要素が含まれるからである。歴史書は事実を客観的に記述することを主眼としているので、できる限り作者の主観は排除されるべきである。断定の語気を表す「矣」も、『五代史記』列伝では17.4字、『旧五代史』列伝では11.9字であり、両者の使用数に顕著な差異は見られない。作者の推断、決定の語気を有する「矣」は、認定の虚詞と同様に、事実を伝える歴史書において、その使用は慎重にならざるを得ないであろう。事実を客観的に（作者の感情を排除して）正確に伝えようとするのが歴史書の役割なので、虚詞の使用について作者の異なる『五代史記』列伝と『旧五代史』列伝における相関関係が強いという結果が生じたと考えられる。

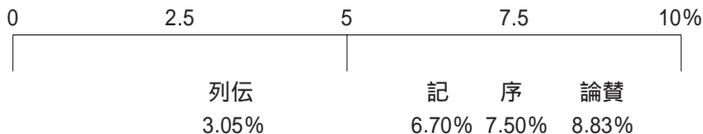
一方、論贊については、まず『五代史記』卷三十四、一行伝論贊を例にあげて虚詞の使用を考えてみたい。（煩を避けて原文のみを掲載する）

虚詞の使用から見た歐陽脩『五代史記』の文体的特色

嗚呼、五代之亂極矣。傳所謂天地閉、賢人隱之時歟。當此之時、臣弑其君、子弑其父、而搢紳之士安其祿而立其廟、充然無復廉恥之色者皆是也。吾以謂自古忠臣義士多出於亂世、而怪當時可道者何少也。豈果無其人哉。

ここで使用されている詠嘆をあらわす「哉」について、表2によると『五代史記』列伝部分では1.1字しか出現しなかったが、『五代史記』論贊では66.9字の出現となる。列伝部分に比べると圧倒的に「哉」の使用が多く、論贊には歐陽脩の詠嘆が直接的に表出されていることがわかる。また、作者が表述しようとするのがらについて、読み手に問いたずら語気、または自分自身に問いかける語気を強調する意味を持つ「歟」は、前掲した『五代史記』の25人の伝では一度も使用されていないが、論贊ではこの一行伝論贊を含めて28箇所互って使用されている。更に、一行伝論贊でも使用されている断定の語気を持つ「矣」も、表2によると論贊部分においては列伝部分の4倍以上使用されていることになる。他にも、認定（疑問・反語、感嘆も含む）の「也」と、同じく認定を表す「焉」、「爾」、「耳」の4つの虚詞を総合してみると、列伝では55.5字の使用に対して、論贊ではその約4倍の211.6字も使用されることになる。これら認定、断定、疑問・反語等、作者の感情が含まれる虚詞は、論贊部分では大いに使用されていることがわかる。

ここで、歐陽脩の普段の文章における虚詞の使用傾向について類推しておきたい。比較的表現上の制約の少ない、記・序のジャンルについて、歐陽脩の記、全38篇（総字数、17262字）において、総字数に占める上述の15の虚詞の割合は6.70%で、歐陽脩の序、全49篇（総字数、21421字）において、総字数に占める上述の15の虚詞の割合は7.50%という結果になる。また、歐陽脩の記と序との間におけるピアソンの相関係数は0.9935で、限りなく1に近く極めて強い正の相関関係（類似性）を示している。おそらく、歐陽脩は表現上に制約が少ない記・序においては、虚詞を自由に使用していると考えられるので、このように類似性が強くなったのではないだろうか。つまり、記や序における虚詞の使用状況が、普段の歐陽脩の文章の姿に近いと思われるのである。ここで『五代史記』論贊と『五代史記』列伝、記と序における15の虚詞の使用割合を図式化してみると次のようになる。



歐陽脩の普段の文章では、15の虚詞の使用比率はおそらく記や序と同じく6.5~7.5%くらいであって、列伝部分ではそれらより遙かに少ない割合(3.05%)で虚詞が使用され、論贊においては記・序よりも多い割合(8.83%)で虚詞が使用されていることがわかる。

『五代史記』の論贊について、歐陽脩「事迹」では「發論必以嗚呼」と記述するように「嗚呼」という擬声語(感嘆詞)で始まることが多いことから、そこには歐陽脩の感情が直接表出されていると指摘されてきた。今回、論贊に用いられた虚詞を調査してみると、詠嘆を表す「哉」、疑念を表す「歟」、認定を表す「焉」、「爾」、「耳」、認定、疑問・反語を表す「也」、断定を表す「矣」、疑問・反語や感嘆を表す「乎」等が列伝部分より圧倒的に多く使用されていることが確認できた。「嗚呼」という擬声語だけでなく、論贊における虚詞の使用傾向から見ても、そこには作者歐陽脩の思いが強く表出していることが裏付けられる。一方、論贊と比較して『五代史記』列伝部分において、作者の感情を表す虚詞の使用が少なかったのは、事実を客観的に伝えるという意識によって、自己の感情が含まれる表現の使用を彼が意図的に避けたと考えられるのである。そして、感情を表す虚詞の使用を意識的に抑えるという、こうした態度を一貫して持続する緊張から解き放されて、歐陽脩が自由に執筆できたのが論贊部分であり、従ってそこに自己の主張や感情が一気に噴出したと思われるのである。列伝部分で抑制していたこともあって、『五代史記』論贊では、普段の歐陽脩の文章より一層多い虚詞(特に感情を添加する虚詞)が使用されたと言えるのである。

#### 四 徐無黨注について

ところで、今日、歐陽脩の『五代史記』には徐無黨の注が施されている。徐無黨については、その経歴を探る手がかりは少なく、『永康縣志』巻六の記載によると、徐無黨は初名・光、永康五崗の人で、その生年は未詳だが、皇祐5年(1053)に省元となり澠池縣を治め、嘉祐2年(1057)には郡教授に遷り、その後著作郎、政和殿学士に昇進し、元祐元年(1086)に没していることがわかる。

従来の歴史書の注釈は、作者と時代の隔った後世の人が作成することが多く、まれに作者自からが注することはあっても、それは著書全篇にわたって体系的に行なわれる様なものではなく、特定の本文に対する簡単な注釈であった。ところが、徐無黨は歐陽脩と同時代の人であり、しかも徐無黨注には作者しか知り得ない編纂方針や体例などが表出しており、これまでの歴史書の

虚詞の使用から見た歐陽脩『五代史記』の文体的特色

注釈とはその性質が異なっている<sup>(9)</sup>。そのため、徐無黨注に対する先人の説をまとめると、大きく以下のように3つに分けられる。

- (1) 徐無黨注は歐陽脩が作成したものである。
- (2) 徐無黨注は歐陽脩が口授したものである。
- (3) 徐無黨注は徐無黨が独自に作成したものである。

本章では、徐無黨注における虚詞の使用状況に着目して、その文体上の特色を考察し、これら3説のうちどの可能性が一番高いのかを明らかにしたい<sup>(10)</sup>。

まず、(1)「徐無黨注は歐陽脩が作成したもの」という説は、たとえば清・俞正燮『癸巳存稿』巻八に、

歐史本有注。署其甥徐無黨名。其注於新義隱義、以一二語抉之。甚精到。但未整理文詞耳。疑歐自注而署徐名者。後人譏其淺陋、非也。歐史は本もと注有り。其の甥徐無黨の名を署す。其の注は新義隱義に於て、一二の語を以て之を抉す。甚だ精到なり。但だ未だ文詞を整理せざるのみ。疑ふらくは歐自ら注して徐名を署する者なり。後人其の淺陋なるを譏るは、非なり。

と記述する。徐無黨注は実は歐陽脩が作成した自注であり、歐陽脩は注釈者を徐無黨と署名したのだと指摘する。

(2)「徐無黨注は歐陽脩が口授したもの」という説は、元・呉師道『敬鄉録』巻二に宋・呉縝の『五代史記纂誤』を引いて、「咸林呉縝作纂誤、稱公以授徐子爲注」と述べ、歐陽脩が教授し徐無黨注が出来上がったと見なしている。また、内藤湖南『支那史学史』においても<sup>(11)</sup>、

新五代史の徐無黨の注は、歐陽脩が口授して書かせたと云はれるもので、己れの書法を辨明するためのものである。

と記述し、『五代史記』の徐無黨注は歐陽脩の口授に他ならないと指摘する。

(3)「徐無黨注は徐無黨が独自に作成したもの」という見解は、たとえば清・王鳴盛『十七史商榷』巻九十四の「方是、徐無黨乃附會歐史爲説云…」という記述から、王鳴盛は徐無黨注の独自性を認めていたことが窺える。

ところで、徐無黨注は『五代史記』本紀十二卷(梁本紀三卷・唐本紀四卷・晉本紀二卷・漢本紀一卷・周本紀二卷)に多く、全部で204条施されている。

る<sup>(12)</sup>。徐無黨注の特色は、本文の編纂方針や体例を説明することが多いことにある。たとえば『五代史記』巻一、梁本紀の冒頭の次の注に着目したい。

本紀、因舊以爲名、本原其所始起而紀次其事以時也。卽位以前、其事詳、原本其所自來、故曲而備之、見其起之有漸有暴也。卽位以後、其事略、居尊任重、所責者大、故所書者簡、惟簡乃可立法。

本紀は、舊に因りて以て名を爲す、本は其の始めて起る所を原ねて、紀は其の事を次ぬるに時を以てするなり。卽位以前は、其の事詳し、其の自りて來る所を原本す、故に曲にして之を備へ、其の起ることの漸有り暴有るを見ずなり。卽位以後は、其の事略す、居尊く任重く、責むる所は大なり、故に書する所は簡なり、惟だ簡にして乃ち法を立つべし。

この注は、本紀というものの由来と、卽位以前は詳しく記述し、卽位以後は簡潔に記載するという、編纂の方針を明らかにしたものと言える。しかも、この注が『五代史記』巻一、梁本紀本文の記述に先んじて施されていることは注目すべきであろう。すなわち、これは本文の具体的記述に対応した注ではなく、本文の初めに『五代史記』全体を貫く基本方針を表明したものと言える。とすれば、この注は到底徐無黨が単独で作成したとは考えられず、何らかの形で作者・歐陽脩の関与があったと推測されるのである。

その他、本文の編纂方針や体例を明らかにした注は数多く、いま幾つか列挙すると以下の通りである。(煩を避けて原文のみを掲載する)

凡稱某州某人者、皆其節度使。(巻一、梁本紀)

赦文皆曰大赦天下……(巻二、梁本紀)

自卽位以後、大事則書、變古則書、非常則書、意有所示則書、後有所因則書。非此五者、則否。(巻二、梁本紀)

五代亂世、兵無虚日、不可悉書。故用兵無勝敗、攻城無得失、皆不書。……(巻二、梁本紀)

命官不書、非常而有故則書……(巻三、梁本紀)

軍亂書首惡……(巻三、梁本紀)

凡官皆不重書……(巻三、梁本紀)

追尊祖考、則立廟可知、故皆不書廟……(巻五、唐本紀)

五代十三君、立后者七、辭有不同、立得其正者、曰以某妃、夫人某氏爲皇后、某不正者、直曰立某氏爲皇后。(巻五、唐本紀)

本紀書災不書異……水、旱、風、蝗之類害物者、災也、故書。其變逆

虚詞の使用から見た歐陽脩『五代史記』の文体的特色

常理不知所以然者、異也、以其不可知、故下書爾。(卷五、唐本紀)

これらの注は、いずれも本文の個別の記述に対する具体的注釈と言うよりも、『五代史記』全体にわたる基本的な執筆方針の表出である。注に見られる、こうした作者・歐陽脩しか知り得ない編纂方針や体例の表出から考えると、徐無黨注は歐陽脩と何らかの関連があるのは間違いないと思われる。従って、王鳴盛のように徐無黨注は徐無黨が独自に作成したと見なすことは考えにくい。とすれば、上述した3説のうち、残りの「徐無黨注は歐陽脩が作成した」か「徐無黨注は歐陽脩が口授したもの」という2つの可能性が考えられる。そこで、徐無黨注の文体的特色に着目してこの2つの見解について考察したい。

前述した15の虚詞が『五代史記』本紀における徐無黨注で幾つ使用されているかということを表3にまとめた。

(表3)

	総字数	而	也	因	乃	則	然	矣	蓋	爾	乎	哉	焉	耳	邪	歟
徐無黨注	8197	166	141	11	10	36	19	24	15	28	2	0	2	3	0	0

ここで、徐無黨注における15の虚詞の割合を調べると5.58%である。これは既に見てきた如く、記や序のような歐陽脩の普段の文章に含まれる虚詞の割合(6.5%~7.5%)より低いことがわかる。更に、スピアマンの順位相関係数を求めたい。スピアマンの順位相関係数とは、前述したピアソンの相関係数が個数に基づいて係数を析出するのに対して、使用数の多い順に虚詞に順位をつけ、その順位に基づいて2つのデータ列の相関関係を求めたものである。やはり、-1から1の間の実数値をとり、1に近いときは2つのデータ列には正の相関があると言い、-1に近ければ負の相関があると言う。0に近いときはもとのデータ列の相関は弱く、類似性の度合いが低いことになる。

徐無黨注と『五代史記』本紀、列伝、論贊との間におけるスピアマンの順位相関係数はそれぞれ0.4026、0.6651、0.5026となり、いずれも1から大きく離れている。もちろん、徐無黨注は注釈なので歴史書の本文とは文体の傾向を異にする可能性も考えられる。そこで、徐無黨注と歐陽脩の他の文章、たとえば記(全38篇)、序(全49篇)におけるスピアマンの相関係数を確認すると、それぞれ0.5928、0.6535となり、やはり1から大きく乖離している。つまり、徐無黨注の文章は、歐陽脩が作成した『五代史記』本紀、『五代史記』列伝、『五代史記』論贊、更には記、序のいずれの文章とも類似性(相

関係) がかなり低いことがわかる。言い換えると、徐無黨注に見られる文体の傾向は歐陽脩のそれと全く異なっているのである。既に見てきたように、虚詞の使用にはその作者の個性や特色が表れる。とすれば、徐無黨注の文体の特色は歐陽脩と全く違うので、徐無黨注は歐陽脩とは別人の手になるものだと考えられる。従って、虚詞の使用から見ると、清・俞正燮が『癸巳存稿』で指摘するように徐無黨注は歐陽脩自らが作成したという説は成り立たない<sup>(13)</sup>。

では、今一つの説である徐無黨注は歐陽脩の口授であるということについて、徐無黨と歐陽脩との交流関係に着目して考えたい。2人がいつ頃から交流し始めたのかということについて明確にはできないが、慶曆2年(1042)36歳の歐陽脩が滑川(河南滑縣)通判として、当地に赴任した際には、既に徐無黨は歐陽脩につき従っていた様である。滑川の帰雁亭を題材とした「歸雁亭」詩の冒頭に「荒蹊臘雪春尚埋、我初獨與徐生來」と言い、歐陽脩は徐無黨を同行して通州に赴任したのである。ここから、歐陽脩は徐無黨を信頼し、親密に交流していたことが窺われる。

その後も、歐陽脩は折にふれて徐無黨に対して自己の意見を述べる。たとえば、至和元年(1054)の徐無黨の帰郷に際して、歐陽脩は「送徐無黨南歸序」を作る。そのなかで、彼は徐無黨の今後の学問のあり方について次の様に希望する。

東陽徐生、少從予學、爲文章、稍稍見稱於人。既去而與羣士試於禮部、得高第、由是知名。其文辭日進、如水湧而山出。予欲摧其盛氣而勉其思也。故於其歸、告以是言。

東陽の徐生、少くして予に従ひて學び、文章を爲り、稍稍として人に稱せらる。既に去りて羣士と禮部に試せられ、高第を得、是に由りて名を知らる。其の文辭日に進むこと、水湧きて山出づるが如し。予、其の盛氣を摧きて其の思を勉めしめんと欲するなり。故に其の歸るに於て、告ぐるに是の言を以てす。

ここから、徐無黨が若い頃より歐陽脩につき従って文章を学び、その結果科挙に及第したことがわかる。そして、歐陽脩は徐無黨が今後も慢心することなく、十分に戒めて学問に励むようにと忠告する。このように、彼はしばしば徐無黨に書簡を送り、その学問態度を指導したのである。

また、徐無黨自身は歴史書にかなり関心を抱いていた。歐陽脩の「答徐無黨第一書」に次の如く述べる。

虚詞の使用から見た歐陽脩『五代史記』の文体的特色

魯隱公南面治其國、臣其吏民者十餘年、死而入廟、立謚稱公、則當時魯人孰謂息姑不爲君也。孔子修春秋。凡與諸侯盟會、行師、命將、一以公書之。於其卒也、書曰公薨、則聖人何嘗異隱於他公也。據經、隱公立十一年而薨、則左氏何從而知其攝。公羊、穀梁何從而見其有讓桓之迹。吾子亦何從而云云也。

魯の隱公南面して其の國を治め、其の吏民を臣とする者十餘年、死して廟に入り、謚を立てて公と稱すれば、則ち當時魯人孰か息姑は君と爲さざると謂はん。孔子春秋を修む。凡そ諸侯の盟會、行師、命將に與て、一に公を以て之を書す。其の卒するに於てや、書して公薨ると曰へば、則ち聖人何ぞ嘗て隱を他公と異にせんや。經に據れば、隱公立つこと十一年にして薨れば、則ち左氏何に従ひて其の攝を知らん。公羊、穀梁何に従ひて其の桓に讓るの迹有るを見ん。吾子も亦た何に従ひて云云せん。

この記述から、徐無黨が魯の隱公の死に関して独自の見解をうち立てていたことが窺える。それに対して、歐陽脩は左氏伝、公羊伝、穀梁伝がいずれも信ずるに足らず、徐無黨の意見も誤っていると指摘した。ただ残念ながら、徐無黨の作品自体は今日に伝わらないので、その詳細を窺うことはできない。しかし、この記述から、徐無黨が歴史書の精髓といえる『春秋』に強い関心を抱き、しばしば歐陽脩と意見交換していたことは分明となろう。

さて、歐陽脩は『五代史記』を完成させた翌年、徐無黨に書簡を送る。

仍作注有難傳之處。蓋傳本固未可、不傳本則下注尤難、此須相見可論。仍ほ注を作るに傳へ難きの處有り。蓋し傳本は固より未だ可ならず、傳本ならざれば則ち注を下すは尤も難し、此れ須らく相ひ見て論ずべきなり。

歐陽脩は『五代史記』に注を施そうと考えた。そこで、彼は徐無黨に対して、注の作成に当たって「須相見可論」という旨の書簡を送ったのである。というのは、歐陽脩は徐無黨としばしば交流し、かつ徐無黨が歴史書に関心があったので、『五代史記』の注について相談できる相手だと考えたからであろう。とすれば、歐陽脩が徐無黨に会い、彼に『五代史記』の注を口授したことは十分に考えられる。しかも、徐無黨注には『五代史記』全体を通しての編纂方針や体例など作者しか知り得ない内容も多く表出しており、それらは歐陽脩の口授があったことを大いに裏付ける。ただ、虚詞使用の分析によれば、その文体は歐陽脩の文体と類似性が極めて低く、別人の手に成ることを示していた。従って、徐無黨は歐陽脩から注の内容について指導を受け

たけれども、注の文章自体はあくまで徐無黨が自己の文体を用いて作成したと言えるのである。これこそ、徐無黨が今日まで『五代史記』注の作成者としてその名を留めた所以なのであった。

## 五 おわりに

『五代史記』は、歐陽脩31歳頃から47歳頃までの、いわば彼の脂の乗りきった青壮年期の作である。しかも、公表する意志のない、あくまで私的なものとして歐陽脩が編纂したものである。従って、『五代史記』には歐陽脩の意図や意向がストレートに反映されていて、そこから彼の思想や歴史観を直接窺うことができる。当然『五代史記』に用いられている文章自体も、歐陽脩が如何なる制約も受けずに自己の目指そうとする文体を用いて執筆したと言える。『五代史記』に用いられた文体は古文であり、それは歐陽脩が古文を理想としていたことを示しており、古文において作者の文体上の特色が表出しやすい虚詞の使用状況から見ると、歐陽脩は本紀や列伝で虚詞の使用を抑え、論贊では虚詞を思う存分に用いるという使い分けをしていたことがわかる。更に、虚詞の用い方の特色から『五代史記』に附された徐無黨注の文体は、歐陽脩の文体と全く傾向が違い、歐陽脩の口授を受けた徐無黨があくまで彼自身の文体を用いて作成したことも明らかになった。

清の錢謙益は「僕初學爲古文、好歐陽公五代史記」（『答山陰徐伯調書』）として、歐陽脩の『五代史記』を手本として古文を学んだと言う。『五代史記』は歴史書としてのみならず、歐陽脩の代表的古文によって執筆された作品として、今日まで高い価値を持つのである。

## 注

- (1) 『中国文学報』第18冊、1963年。
- (2) 『五代史記』の執筆時期について詳細な検討を行ったものに、佐中壯「新五代史撰述の事情」（『史学雑誌』50-1、1939年）、石田肇「新五代史撰述の経緯」（『東洋文化』41、42合併号、1977年）等があり、景祐4年（1037）に彼が夷陵へ左遷される以前に『五代史記』の執筆計画はあったが、その本格的な執筆は夷陵に左遷された後で、その後17年間の歳月を経て皇祐5年（1053）にほぼ完成していたということである。
- (3) 内藤湖南『支那史学史』（『内藤湖南全集』第11巻所収、初出は1949年）「宋代に於ける史学の進展」の章、202頁の記述。

虚詞の使用から見た歐陽脩『五代史記』の文体的特色

- (4) 劉德清『歐陽脩論稿』（北京師範大学出版社、1991年）273頁の記述。
- (5) 前野直彬編『中国文学史』（東京大学出版会、1975年初版）147頁の記述。
- (6) 虚詞、虚字、助字という語句の用い方については、論者によって、あるいは時代によって概念の相違が若干存在すると思われるが、本稿では広く「虚詞 虚字 助字」と考え、引用文の関係で虚字、助字という語句を使用する以外は、虚詞という語句を用いた。
- (7) 各朝から選んだ25人は次の通り。後梁（敬翔、寵師古、寇彦卿、王重師、王檀）、後唐（郭崇韜、周德威、元行欽、符習、劉贊）、後晋（景延廣、呉鬱、趙瑩、馬全節、王建立）、後漢（蘇逢吉、史弘肇、楊邠、王章、郭允明）、後周（王朴、鄭仁誨、翟光鄰、馮暉、王殷）。
- (8) 本稿における虚詞の意味やその働きについては、主として牛島徳次『漢語文法論（中古編）』（大修館書店、1971年）に基づき適宜他書を参照した。
- (9) たとえば、内藤湖南は注（3）『支那史学史』において「なお新唐書・五代史記以前の歴史は、之に注を作るものがあっても、それは後の人がそれを解釈する為めのものであった。然るにこの二書になってからは、その注の趣が変わって来た」と記述し、歐陽脩の『五代史記』、『新唐書』から歴史書の注釈が変化したことを指摘する。
- (10) 筆者は、以前拙稿「歐陽脩『五代史記』の徐無黨注について」（『文学研究』第87輯、1990年）の中で、徐無黨注は歐陽脩の口授だという結論を導いた。ただ、その際は専ら徐無黨注の内容に視点を据えた考察であった。そこで本稿では、前稿では全く取り上げることのできなかつた徐無黨注の文体面に着目するという視点から考察を進めた。従って、論旨の都合上、一部前稿と重複する部分があるがご了解いただきたい。
- (11) 注（3）内藤湖南『支那史学史』204頁の記述。
- (12) 『五代史記』本紀には209条の注が施されているが、そのうち徐無黨以外の注釈が5条雑じっている。『五代史記』巻一、梁本紀・中和3年5月の記述に施された注は「流俗本「宣」從「王」者非」であり、「流俗本」という表現は、明らかに後世の校勘記が混入したことを示している。更に、梁本紀の光化元年7月から元祐元年4月までの記述に附された4条の注は、いずれも「曾三異校定日」で始まっている。曾三異は、南宋時代周必大を中心とする『歐陽文忠公集』編纂に参画した文人の一人である。従って、これら5条を除いた204条が『五代史記』本紀の徐無黨注ということになる。
- (13) 兪正燮の説が成り立たないことについて、他にも筆者は注（10）拙稿の中で、兪正燮が徐無黨を歐陽脩の甥と誤謬していることを指摘した。